

ずいそう

夢を追う

松岡義之



バンクーバーオリンピックの開催を間近に控え、スポーツ界は益々活気に満ち溢れているように思えます。4年に一度のスポーツの祭典、オリンピック。世界中のトップアスリートたちが繰り広げる熱い戦い。その中で、私が人生を懸けて情熱を注いできた競技が「柔道」です。競技者として、指導者として、常に夢を追って戦ってきた人生についてお話したいと思います。

私が柔道を始めたのは中学生の頃でした。当時の私は小柄でしたが、自分より体格の大きい者を倒した時の快感は何とも言えないもので、柔道の魅力にどんどんのめりこんでいきました。高校・大学時代は、個人戦というよりも団体戦での活躍に重点を置いていたこともあり、自分自身にとってオリンピックというものは、夢のまた夢というような存在でした。しかし、兵庫県警へと就職し、日々レベルの高い仲間たちと稽古に没頭していくうちに、実力も付き、自然に世界へ意識が向いていきました。

26歳で初めて出場した世界選手権で2位となり、オリンピックへの手応えを掴み、そして翌年のロサンゼルスオリンピックへの切符を手にすることができました。

念願のオリンピック代表になってから、大会本番の当日を迎えるまで、今までにないプレッシャーとの戦いが始まり、眠れない日々も多々ありました。しかし、それまでの誰にも負けない稽古量が、揺るぎのない自信となって、私を支えてくれました。夢だと思っていたオリンピックの舞台で金メダルを獲得し、「何事も、自分を信じて貫けば、達成する事ができる」と、この時強く感じました。

その後、現役を引退し、全日本のコーチとして幾つかのオリンピックに同行し、そこで活躍する選手を間近で見るうちに、自分自身味わったオリンピックでのあの感動や興奮を教え子たちにも味わってほしいという想いが強くなり、18年間勤務した兵庫県警を退職し、心機一転、「コマツ女子柔道部」の監督に就任しました。

コマツ女子柔道部の監督に就任してからの13年間は、苦勞の連続でした。

就任した直後のチームは、お世辞にも世界を目指せるようなチームとはいえませんでした。選手をスカウ

トし、意識改革からのスタートで、オリンピック代表を育てるには、時間を必要としました。そんな苦勞が報われたのが、谷本歩実選手との出会いです。コマツに入社する前の谷本選手は、一本を取る魅力に溢れた選手でしたが、その反面、波があり、調子の浮き沈みが大きい選手でした。しかし、コマツ入社後、安定した力をつけ、思い切りのいい柔道で、見事に金メダルを獲得しました。この瞬間は、指導者として、最高の感動を選手から与えてもらいました。その4年後、谷本選手や私にとって、2度目の挑戦となった北京オリンピックでは、直前の腰の怪我也有り、常に不安を抱えながらの調整でしたが、大会本番では、怪我の影響などまったく感じさせず、宿敵であるフランスのデコス選手に、決勝戦で見事な内股を決め、見事2連覇という偉業を達成してくれました。

共に夢を追い、幾つもの苦勞を乗り越えてきた選手と一緒に味わう喜びや感動は、私の人生での最高の瞬間です。

監督という仕事は、一つの大きな試合が終わっても、また新たな試合が迫り、気持ちを心底休める余裕は無く、精神的にも肉体的にも大変な仕事です。

しかし、10人の選手がいれば、10人分の夢を一緒に追う事ができる、そんな夢のある仕事でもあります。

コマツという最高の環境で柔道に打ち込めることへの感謝の気持ちを忘れずに、今後とも応援して頂いている多くの皆さんと感動を共有できるよう、また、勇気や元気を届けられるようなチームにしていきたいと思えます。



—まつおか よしゆき コマツ女子柔道部 監督—